

第1章

仕事を終え、少し重くなった足取りで駅へ向かう。

肩や首に残るだるさを誤魔化すように歩きながら、夕暮れの駅前を通り抜けた。そのとき人気の引いた通りから声をかけられる。

「こんばんは。お仕事、お疲れ様です」

振り向いた瞬間、思わず足が止まった。

そこに立っていたのは、施術用のウェアを身にまとった、はっとするほど整った顔立ちの男性だった。すっと通った鼻筋、形のいい唇、涼しげなのにどこか色を含んだ目元。視線を向けられただけで、胸の奥がわずかにざわついた。

「もしよろしければ、こちらを」

彼は美しい笑みを浮かべ、迷いのない動作でリーフレットを差し出した。それを受け取ってみると『感覚施術 Lu xeサロン』と書かれていた。

「感覚施術……」

ここ数年で、リラクゼーション業界の常識は大きく変わった。

神経反応型ボディケア、深層リラクゼーション、感覚調整アプローチとも呼ばれる、感覚施術は、身体の奥に働きかけ、快感を伴う反応を引き出すことを前提としている。

触れられて身体が勝手に反応する。力が抜け、呼吸が乱れ、熱がこもる。場合によってはあらぬところが反応してしまう。

そうしたことは、感覚施術では珍しい症状ではなく、施術の過程で起こりうる身体反応として知られていた。代わりに絶大な癒しになったり、疲労の解消につながる。肌の透明感もぐんと上がるらしく、利用する女性は年々増えている。

「はい、感覚施術を行うサロンです」

私の呟きに、目の前の男性が穏やかな声で応える。

「施術を受けられたことはありますか？」

「い、いえ！ ないです！」

慌てて否定する私を見て、彼は美しい笑みを崩さずに頷いた。

「そうですか。初めてだと、少し戸惑いますよね。無理もありません」

彼の声は、私の緊張を解きほぐすように柔らかかった。

感覚施術を利用する人たちはまだ一部で、積極的に利用する人はまだ多くない。全身を触られるという施術は、抵抗感や恥ずかしさから敬遠する女性も多く、あくまで選択肢のひとつという扱いだ。

それにすべてのセラピストが同じ施術技術を持っているわけではない。反応を引き出すのが得意な者もいれば、そうでない者もいる。その差は施術を受ければすぐにわかるほどで、セラピストは今や「当たり外れのある専門職」として認識されつつあった。

「実は当サロンは先日オープンしたばかりなのですが、立地がかなり悪く、お恥ずかしながらお客さまの入りが悪いので体験モニターを募集しております」

「体験モニター、ですか……」

「はい。本来は少々高額なコースなのですが、モニターさまには無償で提供します」

「そうなんですね」

（無償ってことはタダ？でも、感覚施術はちょっと……人によっては胸とか色々触られたけど、ちっとも気持ち良く

なかったっていう人もいるらしいし……)

「……実は、少し気になって。お客さま、デスクワークの方ですよね？かなり慢性的になってきていませんか？」

「え。はい、そうです」

「やっぱり。お節介かと思いましたが、つい」

彼の視線が、私の肩から背中にかけてをゆっくりとなぞった。なんだか服を着ているのに裸を見られているような気分になって、私はぎゅっと手を握った。

「肩こりの改善も期待できますよ。それに肌のトーンも上がります……よろしければ、サロンにいらっしゃいませんか？リラックス作用のあるハーブティーもお出ししますよ」

彼の提案は、なんだか悪魔の囁きのように甘く響いた。

(ここまで言ってくれているし。サロンに行くだけ、なら……)

「じゃあ、あのお願いします」

「ありがとうございます。僕は御堂綾人（みどうあやと）と申します、よろしくお願いしますね」

男は目を細めて微笑んだ。

御堂さんに案内されたのは、路地裏にひっそりと佇むビルの2階だった。隠れ家のようなその場所は、確かに立地が悪い。クチコミで広がりでもしなければ、厳しそうだと思った。

サロンの中に入ると、品のいいアロマの香りに包まれた。そこは上質な調度品で整えられた、ホテルのラウンジのような空間だった。

「こちらへどうぞ」

奥のソファに促され、問診票を手渡される。肩こり、腰痛……悩みの種を正直に書き連ねていき、御堂さんのカウンセリングを受けた。

「そうですね、お客さまの症状からして、何度か通われることをお勧めします」

「何回か、ですか……」

「はい。ですが、モニターになってくださるのでしたら、特別にお客さまは今後何度通われましても無償で提供しますよ」

「え！何度って、何回来ても無償ですか？」

「はい。いかがされますか？受けてくださいますか？」

「……ええと、はい。お願いします」

彼の優しい声と、穏やかな瞳に見つめられ、私はこくりと頷いた。

「承知いたしました。僕が責任を持って施術をしますね」

御堂さんの声に、ほんのわずかな熱が混じった気がした。

案内された施術室は、間接照明の柔らかな光が揺れる、幻想的な空間だった。

「これが施術用のウェアです。お着替えを済ませて、ベッド台でお待ちくださいね」

そう言って手渡されたカゴの中身を見て、私は息を呑んだ。

入っていたのは、白いシルク調の布地が僅かに肌を覆うだけの、あまりにも大胆なデザインのウェア。ブラは胸の先端を隠すのがやっとで、ショーツに至っては、ほとんど紐で構成されたTバックだ。

（こんな格好するの……？）

羞恥に身体が固まっていると、ドアの向こうから「お着替え、いかがですか？ なにか問題がありましたか？」と声かけられた。

「い、いえ！ 大丈夫です！」と答え、覚悟を決めて服を脱いだ。

(……でも、こういう施術は皮膚の反応を見たり、筋肉の動きを確認したりするから露出が多いって、ネットでもまとめられてたっけ……恥ずかしいけど、仕方ないんだよね……)

ちゃんとした理由があるのだと自分に言い聞かせ、布の少なすぎるウェアを身につける。そして急いでベッド台に腰掛けた。

「すみません、終わりました……」

「いいえ。では失礼しますね」

オイルの入った小瓶を手に、カーテンをさっと開けて御堂さんが入ってくる。

(これから感覚施術が始まるんだ……)

そう思うとそわそわして、私はベッド台のシーツをぎゅ

っと握りしめた。私の緊張を察したのか、彼は安心させるように微笑んだ。

「では、始めますね。まずベッド台に浅く腰掛けてください」

御堂さんは私の背後に座ると、凝り固まった肩をゆっくりと揉みほぐし始めた。彼の大きな手が、的確に凝りの芯を捉える。じんわりと熱が広がり、強張っていた筋肉がほどけていくのがわかる。

「……だいぶ、溜め込んでいましたね。では今からリンパを流していきますね」

彼の指が、二の腕から脇の下へかけて、ゆっくりと滑る。久しぶりに触れられる男性の体温に、思わず身体が強張った。

「……力が入っていますね。もっと力を抜いて」

耳元で囁かれ、びくりと肩が震える。

「ひゃっ……！す、すみません……」

「いいんですよ。慣れないと少しくすぐったいですよ？」

（今のはマッサージじゃなくて、耳元で囁かれたからなんだけど……！）

御堂さんは気にした素振りも見せず、施術を続ける。

「ゆっくり息を吸って……吐いてください。そう、上手です」

彼の声に導かれるように深呼吸をすると、強張っていた身体から少しだけ力が抜けていく。その隙を逃さず、彼の指は鎖骨の下をゆっくりと圧迫していく。けれど痛みはなく、疲労も下へ下へと流れていくような感じだった。

「胸の周りの筋肉が硬くなると、呼吸が浅くなって、疲れが取れにくくなるんです。ここをしっかり解してあげましょう」

段々と肩周りがぽかぽかと温まり、あまりの心地よさに、すっかり身体の力を抜いて彼に身を預けていた。

（気持ち、いい……御堂さんってすごく上手。かっこいいし、上手だしこれならすぐ人気になりそう……）

そう思っていた時だった。

（え……？）

脇の下へと滑る彼の手が、だんだんと軌道を内側にずらし、指先が胸の膨らみを掠めるようになった。乳首に触れるか触れないかの、絶妙な距離感。私の意識は、彼の指の動きだけに囚われていく。

（……あ。感覚施術、だもんね……じゃあ、これから胸も触られちゃうんだ……）

そして彼の指先が、ちょん、と私の乳首の先端に触れた。

「んっ……！」

思わず漏れた声は、幸い彼には聞こえなかったらしい。しかし、それから彼の指は、意図を明確にして乳首に触れるようになった。そのたびに身体がピクッと震え、私は変な声が出ないよう必死に唇を噛む。

「んっ……ふ……う、っ……！」

すると御堂さんは手を止めないまま、楽しむように言った。

「……また力が入ってきましたね」

「す、すみませんっ……！」

「力が入りすぎていると、効果が阻害されてしまうんですよ……そうですね、本当はもう少し時間をかけたかったのですが、もっと身体が正直になれるよう施術の段階を深めましょう」

そう言う御堂さんは、ウェアの上から、両手で私の乳房を包み込み、指先で乳首をくり、くりと弄り始めた。

「えあっ！？な、に……っ！？御堂、さんっ！」

「ここは胸部の神経節が集中するポイントです。ここを刺激して神経反応を促すことで、全身の強張りが効率よく解放されるんですよ」

「はっ、はいっ……んう……ふ、うっ……」

彼は一旦手を止めると、温められたオイルを、私の胸の谷間にゆっくりと垂らした。

「ひっ……！」

「オイルでウェアが少し透けますね。あなたの綺麗な乳首がよく見えますよ」

「〜〜っ！」

「ああ、乳首が勃っていますね……」

「んあっ！あの、だって！」

「では、この可愛く反応しているポイントを……ご要望通り、クリクリと刺激させていただきますね」

「きゃあっ！？」

御堂さんがぎゅっと私の乳首を摘んだ。こよりを作るように、ねっとり、執拗に。時折、ピンと指で弾かれ、下腹部の奥が疼き出した。

（これって感覚施術だと"普通"なの……？　もう、前戯みたいなのに……）

オイルで濡れたウェア越しに、自分の乳首が限界まで硬く尖っているのが見える。その光景だけで、さらに身体が熱くなった。

「ん、ひあ……っふあっ、はああ……」

指でつまみ、引き伸ばし、そして強く揉み潰される。彼が育てた私の乳首。柔らかくなれば硬くされ、硬くなればまた柔らかくされる。

「ご、ごめんなさ……っ！ふ、う……こえ、がまん、できな……っ！」

「声、我慢しなくていいですよ。むしろ、もっと聞かせてください。声を出せば出すほど、効果が出ますから」

「は、はいっ……んう、うあっ……はあ、はあ……」

「大丈夫。僕だけが、ちゃんとあなたの身体を気持ちよくしてあげますから」

御堂さんは私の肩から腕にかけてを優しく撫でながら、言った。

「ですが少し乳首が、窮屈そうですね……こんなに勃起上がって……」

彼の言葉に、ぶわりと顔が熱くなる。

「ウェアは外してしましましょう」

「えっ!？」

有無を言わさぬ優しい手つきで、彼は濡れて肌に張り付いたウェアの紐を解いた。慌てて胸元を腕で隠す私を見て、彼はくすりと悪戯っぽく微笑む。

「申し訳ありません。ですが、このぷっくり腫れて真っ赤になった乳首はとても美しいので、隠す必要はないですよ」

「〜〜っ！ す、すみません……」

「謝る必要なんてありませんよ……では、腰回りの施術に入りますね。少し横になってください」

言われるがままに横になると、羞恥で胸元を隠す私の腕を、彼がそっと引き剥がす。

「気になりますか？ ですがこれは施術の一環ですからね。なるべく僕に集中してくださいね」

「は、はい……」

そしてベッド台に乗り上げた彼が、私の膝をゆっくりと左右に開いていく。正面から無防備な姿を晒され、恥ずかしさのあまり固く目をつぶった。

（これは施術なんだから……変なこと考えちゃダメ……）

「……お客さま、ショーツを外しますね」

「えっ、そ、そんな……っ！」

「大丈夫ですよ、これはあくまで施術ですから」

「〜〜っ！」

とはいえ、ショーツに御堂さんの手が触れると思わず脚を閉じようとしてしまう。けれどそれを確かな力で制され

る。

「駄目ですよ、お客さま……それでは失礼しますね」

「う、は、はい……」

「ええ。では、腰痛の根本原因である、股関節周りの凝りをほぐしていきますね」

下着が取り払われ、無防備な場所を御堂さんの指がするりと撫でる。あまりにも直接的な快楽だった。

「触れますね」

御堂さんの指がショーツの上から、私のクリトリスをゆっくりと圧迫した。明確すぎる刺激に、びくんと腰が跳ね上がる。

「きゃっ！？ や、だっ……！ ま、まって……！」

「ああ、すごい。こんなにも熱を持って、硬くなっている」

「あっ……！ そこは、だ、め……っん！♡」

「どうしてダメなんですか？ ほら、こうして少し圧を加えるだけで、あなたの身体、ぴくぴくと可愛く震えていますよ」